

心理療法における偶然と夢想

九鬼周造『偶然性の問題』を手がかりとして

久松 睦典

答えは、好奇心を不幸、あるいは病気にする。つまり、答えは、好奇心を殺します。破れ目から洪水が広がるのを防ぐために、ぴしやりと素早く答えてしまいたい渴望がいつもあるのです。経験によって、あなたは、自分がいわゆる「答え」を出すことができるとはつきりわかります。しかし、それらは、実際には広がり止めるものです。それは、好奇心を殺すひとつの方法です。特にもしあなたが答えはこれだと信じ込んだならば、そうなります。さもなければ、あなたは誰もまったくわかっていない切れ目や手におさえそうな裂け目を広げてしまいます。…私たちが生きているこの宇宙についてのことを知りたいという心的な好奇心の領域においてさえ、この裂け目は、時期尚早で早まった答えによってふさがれやすいのです。

これは一九七六年にロサンゼルスでおこなわれた講義で精神科医や心理療法家に向けてピオンが語った言葉である。ここでピオンがいう「素早く答えてしまいたい渴望」をい

は物語化することへの渴望である、と読み替えてみることから始めてみたい。「時期尚早で早まった答え」は「好奇心」を殺し、「切れ目」や「裂け目」を一貫した意味を担った物語によって埋めてしまふ。だからここではひとまずそのような「答え」を保留し、物語の裂け目・空白に焦点を合わせてみることにしよう。この空白は意味に反するもの、語ることの困難なものであり、理解しようとするとき期尚早な答えによってふさがれてしまふ恐れをもっている。ピオンにとってそのような態度は治療関係において今まさに新しく生れようとしているものから目をそむけてしまふようなことなのである。

こうした物語化への渴望は、スペンスが「物語の潤滑化」と呼んだ事態と呼応している。スペンスは人間的な領域で意味を追いかける努力はほぼ不可避免的に物語という形式をとるとしながらも、物語のもつ同一性にすべての出来事を回収し、潤滑化しようとする試みは精神分析においてなにも新しいものをもたらしなさと批判している。

物語(narrative)とは、初めと中間と終わりをもった一連の出来事の(想像された)因果的連鎖である、ととりあえず定義することができらる。心理療法において物語という視点が重要なのは、客観の対象になんらかの操作をほどこすことで治療する、といった科学的・医学的なモデルでは捉えることのできない経験の地平を開いてくれると考えられるからだ。ブルーナーに従うなら、いわゆる自然科学が「人間の意図や人間の苦境を越えて不変のままにとどまる世界を制作しよう」とめざす、すなわち「文脈独立性を通じて」普遍性に

達しようとするのに対して、人文科学は見る者の位置とスタンスによって変化する世界を扱い、「文脈依存性を通じて普遍性を達成」しようとするのである。³⁾

治療者とクライアントが間主観的な場で病の物語（あるいは人生の物語）を紡ぎ、語り直していくところこそが治療的なのだと考えるのが、心理療法における物語論的な視点である。精神分析はそもそも「お話療法（talking cure）」から始まった理論・実践であるし、またユングが「私の人生は無意識の自己実現の物語だ」と語ったことからもうかがえるようにユング派においても「物語」という観点は非常に重視されてきた。一方で、社会構築主義を背景にしたナラティブ・セラピーが家族療法から発展してきている。⁶⁾ また、クラインマンは医療人類学という分野において語るという行為を通じて人生の問題が創り出され、制御され、意味のあるものにされていくプロセスを「病の語り（illness narrative）」として論じている。⁷⁾

このように物語という視点は学派を越えてますます強調されるようになってきているのだが、一方で知性化された早過ぎる物語化によってピオンのいうように広がり止められてしまったり、あるいは物語が「潤滑化」されることによって、心理療法の「いまここで」新たに生成する出来事に対する感覚（ピオンはこれを「好奇心」と呼んだ）が失われてしまうという危険性を考慮しなければならないだろう。このような心理療法の「いまここで」生成する出来事を記述することは、それが物語という同一性をもった意味には回収しつくせない

という点で困難を伴う。

ここで心理療法における偶然性の問題に焦点を合わせようとするのも、常に生成しつつある出来事は物語のもつ必然性に組み込まれていないがゆえに偶然という様相をもつて現れるからだ。逆に、偶然性は物語的な筋に反するためにその同一性や構造をゆさぶる働きをもっている。偶然性は「誰もまったくわかっていない切れ目や手におさえそうもない裂け目」として物語にひとつの出来事として起こる。一方で、その裂け目は物語が変化していく可能性にも開かれている。それまで語られていた文脈から外れる偶発的な出来事に注目することで、臨床的リアリティの多様性が開かれ、物語はより多層なものとなるのが可能だろう。いわばその裂け目は織り成された物語がほつれ、壊れるところであると同時に、物語の生成する時間と空間に関わっていると考えられるのである。

どのような時間と空間のセッティングでクライアントと会うかという治療の枠組み、いわゆる治療構造は、たとえば週何回セッションを行うのか、対面か寝椅子を用いるのか、あるいは個人を治療対象とするのか家族をその対象とするのか、といったように学派によって違いはあるものの、それがその心理療法の文脈を構成する大きな要因となることには異論はないだろう。そして治療構造とはそもそも心理療法から偶然性を排除しようとする働きをもっていると言えるのではないだろうか。時間と空間を限定することは、心理療法の中にひ

とつの秩序をもった構造をもちたことである。またいわゆる治療者の中立性も、同じく治療者の日常やプライバシー、個人的傾向などの要因を偶発的なものとみて除外しようとする姿勢である。

しかし果たして心理療法はほんとうに偶然性を排除しているのだろうか？ もちろん、完全に治療の場をコントロールできるなどということはありえず、心理療法の実際にはさまざまな偶発的な出来事が生じる。面接中に電話が鳴ることがあるかもしれないし、誰かが間違えてドアを開けてしまふこともあるだろう。また、天候や地震などの災害が、偶発的に心理療法に深く関わってくることも考えられる。「たまたま寝過ごしして遅刻した」といったような治療構造の揺れもまた、「偶然」という面持ちをもって現れてくる。このような治療者とクライアントの意図に反して起こる出来事としての偶然を、心理療法にとって意味のあるものと見る態度も重要なものだ。そこから治療への抵抗やいきづまりが、あるいは転移・逆転移などの治療関係の様相が読み取られるのである。こう考えると治療構造は偶然性を排除すると同時にそれを意味のあるものとして浮かび上がらせるための働きをもってしていると見ることも可能となる。

フロイトは『日常生活の精神病理』において、しくじりや言い間違い、思い違い、度忘れといった偶発的な出来事を「失策行為」として論じている。日常生活では、雑多でまとまりのない単なる偶然として扱われることの多いこれらの失策行為を、なんらかの意味をもつ心的現象であると仮定したので

ある。フロイトによると、偶然や不注意によると思われがちなこれらの現象は、主体の意図に反して実現される無意識の欲望を表しているのである。こうして失策行為は抑圧された無意識の欲望という必然性のうちに回収されることになる。

それは「たまたま」生じた出来事ではなく、主体の意識的な意図と無意識の欲望のあいだのひとつの妥協あるいは葛藤として必然性をもって表れるのである。「われわれの心理機能のある種の低下(……)とその一見偶然かに見えるある種の変化は、精神分析の方法を適用して検討してみると、明らかに動機があり、しかも、意識には知られていない動機によって決定されていることが分かる」。こうして、日常生活に表れた「偶然」は、精神分析的な眼差しのもとに必然性を見つけられることになる。

精神分析において重要なもうひとつの偶然性は、心的外傷の問題だ。神経症の病因には、幼児期の外傷的な事件が大きな位置を占めていると考えられたのである。たとえば、ブローイアーの症例であるアンナ・Oは、コップから水を飲めないというヒステリー症状をもっていたが、催眠下で彼女が嫌っていた家政婦の飼犬がたまたまコップから水を飲んだのを見たという出来事を思い出す。水を飲めない、という症状が表れたのはその光景を目撃してからであり、ブローイアーの催眠によってそれを思い出すことで症状は消失したのである。フロイトによると「ヒステリーの症状は(……)ある種の外傷的作用をもつ体験によって決定されるのであつて、その体験の記憶の象徴として症状が患者の精神生活の中で再生産され

てくる」のである。「ここでは心的外傷といういわば主体に
つては突然振りかかった偶然的出来事がヒステリーの病因に
関係するものとして考えられている。

「ヒステリー症状」というものは、決して一つの実際の体験
だけから生ずるものではなく、つねにより早期の体験に關する
記憶が連想作用によって呼び覚まれ、それが実際の体験と
一緒に働いてヒステリー症状を生み出す」のであり、分析に
よってより早期の記憶を探索していくと「最後には必ず性的
体験の領域に到達する」というわけだ。ここではヒステリー
の核には性的な心的外傷が不可欠なのかどうかは論じない。
本論にとって重要なのは、臨床場面で表れる症状や行動、関
係性において起こってくる出来事が、幼児期の性的外傷とい
う根本的な出来事（と想定されたもの）に結びつけられてひ
とつの物語が構成されていくプロセスである。

フロイトは考古学のメタファーをもちいて、ヒステリー症
状の核にあると推測される外傷体験を探索する方法を説明し
ている。精神分析家はここでは未知の地方に出かけ、城壁の
残骸や消えて読めなくなった文字を記した石板の破片が散ら
ばる廃墟に立つ考古学者に喩えられる。考古学者はつるはし
やシャベルをもって廃墟を掘り起こし、埋もれていた遺物を
発見するかもしれない。たとえば発見された碑文からかつて
の出来事について思いもよらぬ事実があきらかになることが
あるだろう。考古学者の場合は火災や略奪によって重要な部
分が失われているかもしれないが、精神においては本質的な
ものはすべて保存されており、分析的探索によって患者の幼

児期の生活史を現実的・幻想的に再構成することが可能だと
フロイトは考えていた⁽¹⁵⁾。ようするに、心的外傷を症状形成の
核とする無意識下の物語を掘りだし、再構成することが精神
分析の仕事だということになる。ここでは外傷体験という偶
然的出来事はいわば物語の失われた発端であり、夢分析や自
由連想をつうじて、隠されていた、あるいは断片化されてい
た物語が再構成されることによって治療が遂行されるのであ
る⁽¹⁶⁾。

こうしてみると、失策行為のような偶然、あるいは必然性
が分からない症状（「コップから水が飲めない」などというこ
とは、日常生活をかたちづけている物語からみると異質な
ものであり、その必然性がかめないからこそ「症状」とな
る）の深層には、精神分析によって明らかにされるべき必然
性が存在することになる。表面にみえる偶然性はただその背
後に隠れている動機・必然性がまだ知られていないために
そうみえるのだ、というわけである。

では心理療法には偶然性は存在せず、すべての症状や出来
事はかならず必然性に結びつけられるようになっていくのだ
ろうか？ リビドーが可塑性に富み、多形性倒錯的に、気ま
ぐれに対象を選択することは、本質的には失策行為なども含
む症状形成の中心には偶然性があることを表しているのでは
ないか。あるいは『快感原則の彼岸』でフロイトが反復強迫
のうちにみた死の本能がもつ「デモニーニッシュな性格」は、
「運命」（これは、後にみるように偶然と必然の異種結合とい
う性質をもっている）という容貌をもって表れるのではない

だらうか¹⁵⁾

またユングの「共時性」という概念は、原因と結果という因果律ではなく同時性と意味によって出来事が結ばれるいわゆる「意味のある偶然の一致」という視点が、心理療法を大きく動かすことがあるということに注目したものである。ユングの挙げている事例は治療のなかで起こった偶然の一致を契機として、それまでとは違った方向に展開している¹⁶⁾。実際の臨床では、あらかじめ(無意識的な)必然性が隠れていたとは思えないような出来事が生起するし、それが治療に大きく関わってくることもある。

このように考えると、心理療法は隠された無意識の意味を解読するというよりもむしろその意味が生み出されるプロセスを捉えようとしているといえる。夢や語りのなかのゆがみやあいまいさ、省略といった徴候的な細部にわれわれが注目するの、語られたことのみならずどのように語りが生み出されるかということを見ようとする姿勢だといえる。

さらには心理療法が対話によって生み出される物語に基づいていることを考えると、コミュニケーションの空白にはどうしても偶然性という要因が入って来ざるをえない。お互いに発した言葉がどう受け取られ、解釈されるかということには本質的に未確定性が伴っている。明瞭かつ真実であり、適切な発話、というのはブルーナー¹⁷⁾が述べている通り単語で文字通りであることに他ならない。われわれは、実際に言うことよりももっと多くの意味を伝えようとしたり、実際に述べたこととは違うことを言おうとする。ブルーナーは、このよ

うな意図された(あるいは無意識の、ということも含めていいだらう)違反や「会話の含意」を用いて表現することは、意味の裂け目を生み出すことであり同時にその裂け目を埋める可能性を提示することでもあるという。もちろんこの裂け目には、誤読や誤解の可能性、すなわち意味を受け取ることの偶然性が伴っているといえるだろう。心理療法的な対話はたとえば法廷や議会での対話と異なり、その曖昧さや多義性をむしろ積極的に認めている。

その曖昧さのなかに表れる「誤読」の可能性には、たとえば治療者の言葉が心理状態や対人関係のパターンに関する適切な解釈であると受け取られたり、あるいはそのように言葉をかけること自体が「授乳」や「攻撃」であると受け取られるかもしれないということが含まれている。治療者も同様にクライエントの言葉をさまざまに誤読する可能性をもっている。むしろ、文字通りに受け取らずにイメージとして聴くという態度は「誤読」を生産的なものとして生かしていこうというものだろう。

一般には、原因や理由が分からないまま予期せぬ出来事が起こることを偶然という。心理療法においては、偶然が物語や意味の裂け目として現れてくるということを前章でみた。つづいて九鬼周造(一八八八—一九四一)の『偶然性の問題』を手がかりとして、心理療法の場に意味の定まらない出来事として現れてくる偶然が、どのように物語生成に関わってい

くのかを考えてみたい。

九鬼は八年間のヨーロッパ留学から帰国したあと、京都大学で偶然性をテーマに一連の講義を行った。第一次大戦後のヨーロッパでフッサールやハイデッガーらの新しい哲学が誕生する現場を目撃してきた九鬼は、従来の西洋哲学の根底にあるのが孤立した主体であることを見ぬいていた。そして主体と主体の出会いに現れる偶然性を重視する哲学を志向したのである。必然性を原理とする近代の知を克服するものとして九鬼が取り上げた偶然性の問題は、時間論や文学論などと交わりつつ、「いまここ」における多様性に開かれた他者との偶然的出会いを豊かに記述することを可能にした。ここで臨床心理学とは直接の関係をもたない偶然性の哲学をとりあげるのも、心理療法が個別性や一回性、現在性といった九鬼のいう偶然性の問題と深く関わっていると考えるからである。講義をもとに一九三五年に出版された『偶然性の問題』を概観しつつ、その後、心理療法における偶然性という問題を考えてみることにしよう。『偶然性の問題』の冒頭で、九鬼は次のように述べる。

偶然性とは必然性の否定である。必然とは必ず然^{しか}ることを意味している。すなわち、存在が何らかの意味で自己のうちに根拠^{もと}を有^もっていることである。偶然とは偶々然^{しか}有^もるの意で、存在が自己のうちに十分の根拠^{もと}を有^もっていないことである。すなわち、否定を含んだ存在、無いことの出来る存在である。換言すれば、偶然性とは存在にあって非

存在との不離の内的関係が目撃されているときに成立するものである。有と無との接触面に介在する極限的存在である。有が無に根ざしている状態、無が有を侵している形象である。⁽¹⁸⁾

必然性とは存在が自己のうちに何らかの根拠を、すなわち同一性をもっていることである。これに対して偶然性とはそうした同一性が崩れたところに現れるものだ。偶然性には否定という契機が含まれている。つまり、そうではないこともありえた、ということである。心理療法に限らず、人と人が出会うということのうちには出会わないこともありえたという点で偶然性が根底にある（たとえ事後的に「それは運命の出会いだった」などと物語化されることはあっても）。

九鬼は偶然性を「定言的偶然」「仮説的偶然」「離接的偶然」の三つの様態から捉えている。定言的偶然とは、同一性に包摂することのできない例外的な個物および個々の事象であり、仮説的偶然とはある因果関係の系列とべつの系列が遭遇・邂逅することである。そして離接的偶然とは、ありえたであろう諸可能性のなかから実際に生成したひとつの現実にはそれが無いことも可能だった、という次元が含まれるということを表している。より具体的には、それぞれ実存的な個人としての「私」のことであり、「私」が他者と出会うということであり、その出会いの不思議さや運命性のことであるといつてよい。

「たまたま」という偶然をあらわす言葉の「たま」は、九

鬼によると、「手間」すなわち「間」ということだという。それは時間的・空間的な間隔であり、間隔が広がるほど「まれ」（間有れ）なものとなる（空間的に隣接し、時間的に継起するふたつの出来事のあいだに想像される必然的な関係が因果律であるということを考えるならば、その間隔が大きくなればなるほどそれは偶然性に近づく）。したがって「ま」とは偶然性につながるものであり、たとえば「まが悪い」とは、遭遇した偶然が適合性を欠いていることになる。既に述べた、對話のなかの飛躍や沈黙といった「ま」もまた、偶然性のひとつの表れと考えることができるだろう。

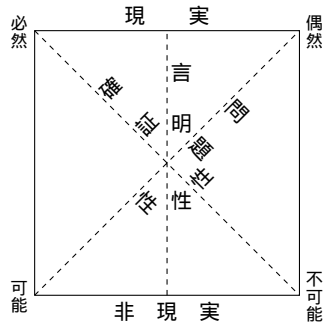
例外的な個物や個々の事象は、それが例外的（すなわち必然性をもたない）がゆえに同一性を揺るがすような存在だ。さきほど実存的個人としての「私」が他者と出会う、といういい方をしたが、その「私」のなかにさえ物語的な自己同一性に収まらない数々の例外がある。外傷的な記憶や神経症の症状、あるいは夢などの非合理とみられるものも、同一性から逸脱するものだといえる。こうした例外的偶発的な事象はその必然性が分からないがゆえに「なぜ」という問われる。こうして、九鬼のいう個別的事象としての定言的偶然⁽¹⁹⁾はふたつの因果系列の出会い・遭遇という問題へと開かれていくのである。

偶然とは、異なる複数の因果系列の出会いにおいて起こるものである。ただ無関係な出来事がばらばらに起こっただけではそれが偶然と意識されることはない。ふたつの因果系列が交叉し、なんらかの変化が生じたときに偶然が意識される

のである。「偶」という字は双、対、並、合などを意味しており、「行き当たりばったり」「めぐり合わせ」「まぐれ当たり」「仕合せ」などという偶然に関する言葉が表しているように偶然性は「独立なる二元の邂逅という意味構造」をもっている⁽²⁰⁾。そしてこのような偶然の邂逅が起こるのは「いま」という時間においてである。

可能性の時間が未来であり、必然性の時間性が過去であるに反して、偶然性の時間性は「いま」を図式とする現在である。いったい、未来的の可能性は現実を通して過去の必然へ推移する。可能は、大なる可能性から不可能性に接する極微の可能性に至るまで、可能の可能性によって現実となる。現実⁽²¹⁾は必然へ展開する。そうして一般に、可能が現実面へ出会う場合が広義の偶然である。

ここで九鬼は偶然性と時間論を結びつけつつ、「いま」において現実が生成してくる、まさにその運動を捉えようとしている。未来性を孕んだ可能が現在性における現実と出会い、展開していく運動である。九鬼は、世界を靜的にみる視点と動的にみる視点を表すとして、ふたつの図を挙げている。必然、偶然、可能、不可能という四つの頂点をもった正方形で表された図だ。まず最初の図（一）では必然と偶然が結びついて現実を構成している。可能と不可能が結びついて、いまだ現実には現れてきていない潜在的なものとして非現実を構成する。現実と非現実を結ぶ破線で描かれた垂直軸は、「言

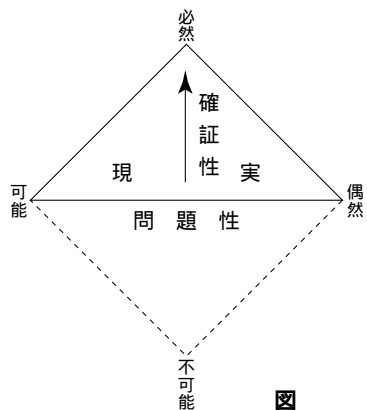


図

極限は不可能性にいたる。ここでは、現実において、「ないことが不可能」(つまり必ずある)なものが必然となり、「ないことが可能」(ないこともありうる)ものが偶然として一対となっている。また、非現実において、「ありうる」ものがいわゆる可能であり、「ありえない」ものがいわゆる不可能であるとして対立関係におかれる。こうした立場ではいわずすべてがステイックで決定的な様相をもつといえるだろう。

一方、もうひとつの図()では、現実はいままさに生成しつつある動的なものであり、したがって問題を孕みつつ展開していくものとして捉えられる。ここでは可能と偶然を結び問題性が起点とされ、先の図でははつきりとしていた現実/非現実の軸の同一性は揺らいでいる。現実の可能性と偶然性によって構成されており、常に問題を展開させている。そして、可能性は未来性にもとづいて「不安」という感情を等価としてもっている。潜在的に、未来を孕んでいるという

明性」と呼ばれる。ここでは現実と非現実の境は明確である。必然と不可能という斜めの対立を結ぶ破線は「確証性」であり、偶然と可能を結ぶ破線が「問題性」ということになる。可能性の極限が必然性となり、偶然性の



図

いて緊張状態は弛緩・沈静していく。その感情等価は「平穏」であり、満足や安心、失望、憂鬱といったかたちをとる。偶然性は、「奇遇」「奇縁」などという言葉が表しているように、「驚異」という感情を等価としてもつ。これは出来事が未解決のままに眼前に投げ出されることへの驚きの感情だ。

驚きを伴うふたつの因果系列の偶然の出会いには、この出会いによってどちらかが、あるいは双方が変化することが避けられないということにつながる。この三元性の緊張をたもつたままその変化を内包していく動きを、九鬼は「偶然性の内面化」として論じる。

偶然性は「この場所」「この瞬間」における独立なる二元の邂逅として尖端の危うきに立って辺際なき無に臨むものである。〔…〕偶然性は学的認識に対して限界を形成してい

緊張がここにはある。不安は未来において可能である事象の性質によって希望や心配というかたちとして表れる。この潜在的な可能性が現実性展開していき必然性にいたると、その過去性にもとづ

る。「……」しかしながら、この限界は理論的実存性に対して端初の意義を有つことを知らなくてはならない。経験的認識は認識の限界たる偶然性から出発し常にこの限界に制約されたものでなければならぬ。経験に斉合と統一とを与える理論的体系の根源的意味は他者の偶然性を捉えてその具体性において一者の同一性へ同化し内面化することに存している。真の判断は偶然、必然の相関において事実の偶然性に立脚して偶然の内面化を課題とするものでなければならぬ。思推の根本原理たる同一律は内面化の原理にほかならない。「甲は甲である」というのは「我は我である」ということにほかならない。「……」しかしそれはエレア的抽象的普遍性における空虚なる同一性を目指すのであつてはならない。同一律による内面化は事実として邂逅する汝の偶然性に制約された具体的内面化でなくてはならない。「……」単なる同一化、単なる必然化は一切の汝、一切の偶然性を否定することによって無宇宙論へ導く。理論的認識の到達すべき理想は単なる必然性であつてはならない。偶然を満喫し偶然性に飽和された「偶然、必然者」でなければならぬ⁽²²⁾。

ここで論じられている偶然性の内面化とは、単なる同一化や必然化ではない。そのような同一化は他者や偶然性を否定した空虚な同一性に還元されてしまうことになる。九鬼のいう内面化とは、一者と他者の統合しえない分裂という二元性から生起してくる運動そのものを内包していくようなものな

のである。

先にあげた図にみられるように、九鬼は可能と偶然の結ばれた問題性という地平から世界を捉えようとした。この図の下半分はいまだ潜在的であるが、可能性や多様性、あるいはカオスに満ちている。そのような場から、偶然という出来事を契機として現実が生成されていくのである。

九鬼周造の偶然性の哲学は、世界を静的な^{スタティック}、あるいは線形的に非知から知へと進歩していくようなもの（このような視点からすると、世界から偶然性が排除されていくプロセスが歴史ということになる）としては捉えなかつた。世界は動的なものであり、潜在的な可能性が偶然性を通じて展開していく運動のなかに成立している。偶然性は経験的認識の限界、エッジを形成すると同時に出来事に満ちた多様な世界の現れを空虚な概念の同一性に還元してしまうことなくつかむ可能性を指し示している。

ピオンもまた、精神的な認識が既知の概念によつて出来事を去勢していくようなものではないことを理解していた。「記憶なく欲望なく」というよく知られたピオンの言葉がある。精神分析的な観察は、すでに起こってしまったことにもこれから起こるであろうことにも関係がない。今まさに生じつつある出来事のみが精神分析の対象とされるのであり、過去の面接の記憶やこうなつて欲しいという未来への欲望は捨てなければならぬ。ここでピオンが言おうとしているのは、面

接の「今、ここで」生じていることを正しく受け取るためには、理論や知識、先入観などによって影響されてはならないし、治療したいという欲望やさらにいえば理解したいという欲望でさえ、生起する出来事を覆い隠してしまうことがありうるということだ。すでに知られていることはその面接に与って関係がない。治療者もクライアントともに知っていることならそれはもはや用済みで、どちらか一方だけが知っているというような状態は防衛になる。そして「あらゆるセッションにおいて精神分析家は、これまでその患者に会ったことがないと感じる心の状態を創り出すことを目指すべき」⁽²⁴⁾だという。

このようなラディカルな意見に従うことで治療者の不安やよりどころのなさが著しく増大するであろうことは容易に予想できる。別のところでピオンはこのような状況を「情緒の嵐」と呼んでいる⁽²⁵⁾。ふたりのパーソナリティが出会い、対話（あるいは沈黙）するところには、それが他者との出会いであるがゆえに情緒的な混乱が多かれ少なかれかならず生じる。通常の対話ではそこで表れるズレや混乱は、それまでの話や対人関係の文脈によって修正されたり、あるいはその対話の目的によって方向づけられるだろう。要するに、過去・現在・未来という日常的な時間のなかに収められることで混乱が回避されるのである。しかしピオンはこの混乱のなかにある未知や不確かさ、混沌などにとどまることこそが「今、ここ」に新たに生まれてくるものを捉まえるためには不可欠だと考える。それは、心理療法にとつて偽りの統合をあたえるメタ・

レベルの視点をカッコに入れて、現在において意識をかぎりなく微分化していくような行為だ。なにか新しい意味を発見・創造するためには、既知の概念にあてはめるのではなく、拡散した出来事に直面してその無意味さを認めるところから始めなければならない。そうでなければ、「好奇心の可能性」は端から押し殺されてしまふことになる⁽²⁶⁾とピオンはいふ。

ピオンのいう「経験から学ぶ」ことは、このように拡散して意味をもたないモノ的な世界と、ひとつの筋をもった物語的な世界のあいだの運動である⁽²⁷⁾。これは「妄想 分裂ボジション」から「抑うつボジション」への移行と呼ばれるような動きと対応している。ピオンは混沌とした状態に対して迫害的にならずに耐えることが治療者には要求されるという意味で、妄想・分裂ボジションにあたる心的状態を「忍耐 (patient)」とし、物語化された抑うつボジションに相当する状態を「安心 (security)」と、端的に述べている⁽²⁸⁾。この移行を線形的な発達段階やあるいは病理からより高次の段階の達成という視点からのみ捉えてはならないだろう。「記憶なく欲望なく」という不可能にも思えるピオンの要請は、むしろこの運動そのものを積極的に抱えていこうとする姿勢に他ならない。これは、たとえばウィニコットが「探求することは、バラバラで無定形に機能することからのみ、あるいはちょうど中立地帯におけるように多分ばかしく見える遊ぶことから、生じてくる。ここでのみ、つまり、この人格の無統合状態においてのみ、創造的といえるものが出現可能なのである」⁽²⁹⁾と述べているような事態とも対応している。

妄想 分裂ボジションでは出来事に一貫性をみる「私」という視点は十分成立しておらず、ものがただ偶発的に生起する(ように体験される)という性質をもっている。一方、抑うつボジションにおいては主体としての自己が誕生し、歴史的な自己が現れる³⁰⁾。もちろん、すでに述べた通りこれは一方通行の発達段階ではない。抑うつボジションのとは口に達することで、両者のあいだの弁証法的な関係をつちたてるところに多少とも成功する³¹⁾のだといえる。

では、クライニアンが妄想 分裂ボジションと呼ぶような体験様式が、病理的で迫害的世界と創造的な世界をともに産出する可能性をもっているかのようにみえるのはどうしてだろうか。創造性と病理の関係について論じるのはここでの射程を越えるので、エレンベルガーの「創造の病」という視点³²⁾との関連を示唆するにとどめ、ピオンが「夢想(reverie)」と名づけたバラバラの体験を包容しつつパーソナルな体験へと変容する働きをもった機能に触れて論を閉じることしよう。

夢想とは、治療者がクライエントの幻想を受け入れ包容(contain)³³⁾することの治療的意義と関連してピオンが論じたものだ³⁴⁾。ひとつで言えば、面接中に治療者の心に浮かぶさまざまな空想や連想が、クライエントの心的内容(それにはピオンが要素と述べた病理的なものも含まれている)を包容し、消化することを助けるという概念である。発達のみにれば、たとえば、母親の夢想は乳児の未分化な感覚や破壊性を抱えることを可能にしてくれる。

バシュラールは『夢想の詩学』で夢想は偶然性や出来事に

反すると述べているが³⁴⁾、しかし夢想とはそもそも「フット」心に思ったり、「ヒョッコリ」浮かんでくるものだろう。これらの擬音は、九鬼が偶然性の聴覚的象徴として挙げた言葉でもある。夢想はたまたま心に浮かんできた意味のないものだと感じられる。心理療法という文脈にかならずしも収まらない、不安定で分かりにくいものとして表れる。

オグデンは、ピオンの夢想という概念を間主観的なコミュニケーションに開かれたものであるとして、発展的に論じている³⁵⁾。夢想は個人的、私的な出来事であると同時に、間主観的なものでもある。夢想がいかにプライベートなものと感じられたとしても(たとえば治療者の生活の出来事をめぐる夢想など)、それを「自分自身の問題」だとして追い払うべきではない。なぜなら、たとえそれが「面接の外」のことと関係しているように思えても、それぞれの治療者とクライエントの関係によつてさまざまに異なった文脈をもつことになるからだという。夢想は分析的対話を構成する言葉と言葉のあいだや沈黙のうちにあり、治療者とクライエントはなにかに思いをめぐらせたり、空想したり、あるいは突然浮かんできたイメージに驚いたりすることができるとして治療者とクライエントの夢想が重なり合う領域に、ウイニコットが「遊びの空間」とか「可能性空間」と呼んだ治療的な場が生まれるのである³⁶⁾。そのような場では、夢想が出来事を抱えると同時に、夢想自体が出来事的に、自由に浮かんでることが可能になる。このように、夢想とは、ちょうど妄想 分裂ボジションと抑うつボジションを、あるいは意味以前の偶発的な出来

事と、物語を橋渡しするような働きをもっていると考えられるだろう。

心理療法は治療構造によって日常と非日常を人為的に区分し、そうすることでいわばいったん立ち止まって自己を振り返ってみよう、という視点を創り出そうとする。そこで私が「私」を対象化して語るといふ行為が可能となり、出来事は継起的な時間配列をもって物語化されていく。しかし自己に対して無限に特権的な視点をもつことはもちろん不可能だし、いままで述べてきたように、心理療法の場合自体に出来事が生起してくるために、物語が閉じられてしまうことはない。むしろ、あまりに首尾一貫した物語は、なにかを覆い隠しているのではないかともいえる。心理療法における偶然性に注目することは、性急な物語化によって見落とされてしまう出来事に微分的な視線を向けるということである。それは、出来事の意味が潜在的かつ未決定でバラバラなために不安のなかに投げ出されるような体験だが、物語が生成し、変化する「今」「ここ」に留まるということでもあった。当然、それは目の前で生起してくる出来事に対して治療者がどのような選択をし、「コミットするか」という問題へとつながっていくのである。

註

- (1) W・ビオン『ビオンとの対話』そして、最後の四つの論文』祖父江典人訳、金剛出版、一九九八年、五二頁。
- (2) D・P・スペンス『フロイトのメタファー』妙木浩之訳、産業図書、一九九二年。
- (3) J・ブルーナー『可能世界の心理』田中一彦訳、みすず書房、一九九八年、八四頁。
- (4) S・フロイト「ヒステリー研究」『フロイト著作集第七巻』懸田克躬他訳、人文書院、一九七四年。
- R・シェファーはスペンスとならんで、精神分析で物語という視点を強調している。Schafer, R., *Retelling a Life: Narration and Dialogue in Psychoanalysis*, New York, BasicBooks, 1992.
- (5) A・ヤッフェ編『ユング自伝』河合隼雄他訳、みすず書房、一九七二年、一七頁。また、ヒルマンも治療とは人生をあらためて物語化することであると論じている。Hillman, J., "The Fiction of Case History: A Round with Freud", in *Healing Fiction*, New York, Spring Publication, 1983.
- (6) S・マクナミー、K・J・ガーゲン『ナラティヴ・セラピー』社会構成主義の実践』野口裕二・野村直樹訳、金剛出版、一九九七年。
- (7) A・クラインマン『病の語り』江口重幸他訳、誠信書房、一九九六年。
- (8) S・フロイト「日常生活の精神病理」『フロイト著作集第四巻』懸田克躬他訳、人文書院、一九七〇年。
- (9) 同上、二〇九頁。
- (10) S・フロイト「ヒステリー研究」。

- (11) S・フロイト、「ヒステリーの病因について」、『フロイト著作集 第十巻』高橋義孝、生末敬三他訳、人文書院、一九八三年、八頁。
- (12) 同右、一二頁～一二三頁。
- (13) 「精神分析における構成の仕事」、『フロイト著作集第九巻』小此木啓吾訳、人文書院、一九八三年。
- (14) スペンスはフロイトのこのような発掘・発見のメタファーを批判し、精神分析で扱われる歴史は「歴史的事実」ではなく共同主観的に構成される「物語的真実」であると論じている。Spence, R., *Narrative Truth and Historical Truth: meaning and interpretation in psychoanalysis*, New York, Norton, 1982.
- (15) S・フロイト、「快感原則の彼岸」、『フロイト著作集第六巻』井村恒郎、小此木啓吾他訳、人文書院、一九七〇年。
- (16) C・G・ユング、「共時性：非因果的連関の原理」、『自然現象と心の構造 非因果的連関の原理』W・パウリとの共著、河合隼雄、村上陽一郎訳、海鳴社、一九七六年。
- (17) J・ブルーナー、前掲書、四三頁。
- (18) 九鬼周造、『偶然性の問題』文芸論、燈影社、二〇〇〇年、六頁。
- (19) 患うこととしての病の問題は、次のようなふたつの根本的な問いを生むとクラインマンが述べていることに注意を払っておきたい。すなわち、「どうして私が？」という困惑の問いと、「何をすることができるのか？」という秩序とコントロールの問いである。
- A・クラインマン、前掲書、三六頁。
- (20) 九鬼、前掲書、一〇四頁。
- (21) 九鬼、前掲書、一八二～一八二頁。
- (22) 九鬼、前掲書、二二二～二二三頁。
- (23) W・ビオン、「記憶と欲望についての覚書」、『メラニークライ

- ン・トゥディ』二二～二七頁、E・B・スピリウス編、松木邦裕監訳、岩崎学術出版社、二〇〇〇年。
- (24) 同右、二三頁。
- (25) W・ビオン、「思わしくない仕事に最善を尽くすこと」、『ビオンとの対話』そして、最後の四つの論文、祖父江典人訳、金剛出版、一九九八年。
- (26) W.R.Bion, *Transformations*, London, Karnac Books, 1965, p.81.
- (27) W・ビオン、『精神分析の方法』セブン・サーヴァンツ、福本修訳、法政大学出版局、一九九九年。
- (28) L・グリーンベルグ、D・ソール、E・T・ビアンチエディ『ビオン入門』高橋哲郎訳、岩崎学術出版社、一九八二年、一二〇～一二二頁。
- 「ビオンの言う「安心」を、九鬼が論じた必然性の感情等価である「平穏」と比べることができるだろう。
- (29) D・W・ウィニコット、『遊ぶことと現実』橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、一九七九年、九〇頁。
- (30) T・H・オグデン、『心のマトリックス 対象関係論との対話』狩野力八郎、藤山直樹訳、岩崎学術出版社、一九九六年。
- (31) 同右、五四頁。
- (32) H・エレンベルガー、『無意識の発見』中井久夫、木村敬訳、弘文堂、一九八〇年。
- (33) W・ビオン、『精神分析の方法』セブン・サーヴァンツ、前掲書。
- (34) G・バシュラール、『夢の詩学』及川護訳、思想社、一九七六年。
- (35) Thomas H. Ogden, *Reverie and Interpretation: Sensing Something Human*, London, Jason Aronson Inc., 1997.

(36) *ibid.*, p.117.

(37) 夢想はフロイトの「自由に漂う注意」と同じような働きを言い表す言葉で、心を感覚的なものから心的なものに移行させる機能をもつ。Joan and Neville Symington, *The Clinical Thinking of Wilfred Bion*, London, Routledge, 1966, p.168.

(38) 川崎は、心理療法に現れる象徴的イメージや転移は、既存の自我の体系を超えたものを体系内において表す、というパラドックスをもつがゆえに自我体系に変化をもたらすことができると論じている。川崎克哲「心理療法において因果律が揺らぐことの意義とその諸形態について」『講座心理療法第7巻 心理療法と因果的思考』河合隼雄編、岩波書店、二〇〇一年、二五頁～七一頁。